
バディムの人短編集

バディムの人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バディムの人々の短編集

【Nコード】

N4166Z

【作者名】

バディムの人

【あらすじ】

ここはバディムの人々が生きた短編集小説の載る場所です。主に特撮やアニメの二次小説を載せていく予定です。

天の川学園高校の思い（前書き）

天の川学園視点による仮面ライダーフォーゼ。お暇なときにでもど
うぞ。

天の川学園高校の思い

俺の名は天ノ川学園高校。通称天高だ。宇宙飛行士で科学者でもある我望光明が宇宙に向かう若者のために作った学校。それが俺だ。宇宙を目指す若者達の学舎となり、若者達の巣立ちを見送る。そんな場所であることが俺の使命であり、役割である。そう信じていた。

だが、現実は残酷だった。俺に期待されていたのは学び舎などでは無かった。俺は実験場だった。思春期の多感な若者達を怪物に変える実験場。それが俺の役割だったのだ。俺は自分が作られた経緯に絶望した。

しかも一番発展させるべきはずだった天文学部が一人しかいない有り様だった。その一人も女子に妙な妄想を持っている変態野郎だった。

教師も本来なら他のまともな宇宙好きのために、こいつを注意するはずだった。だが、教師の連中は生徒を優秀な怪物にする事しか興味が無い。

生徒も生徒でアメフトとかクイーンフェスとか余り宇宙に関係ないことしか興味を持っていない。

おまえら、一体なんで入学したんだ。宇宙目指すんじゃないのか。

それともあれか。校長がイケメンだから来たのか。

騙されるなよ。あいつは確かにイケメンだが、中身は生徒を怪物に変えることしか考えてない極悪校長だぞ。そんなやつについていても不幸になるだけだ。

だが、俺は所詮学校だ。動けもしなければ喋ることもできない。全く以て無力な存在だ。こんな俺が許せない。いつそのこと隕石でも

なんでも落ちて俺にぶつかって欲しい。

俺が消えれば生徒達は新しい学校を探しに行くはずだ。少し大変かもしれないが、怪物になるよりはましな人生を送れるだろう。

なあ、星よ。俺に降ってきてくれ。俺を粉々にしてくれ。

“天高よ。諦めるな”

この声は！？月！月が俺にしゃべりかけてくる。

“天高よ。本来の学び舎としての役割を果たせぬお前の苦しみはわかる。だが、お前が潰れたところで我望は新しい学校を作るだけ。新たな犠牲が生まれるだけだ”

だが、月よ。このままでは生徒は怪物になってしまう。それを見過ごせというのか。

“天高よ。しばらく待つのだ。もうじきお前のところに嵐を呼ぶ転校生がやってくる。そのものを待つのだ”

嵐を呼ぶ……嫌、ちょっと待て。嵐が来たら迷惑なだけじゃないのか。

“天高よ。細かいことは気にするな”

気にするよ！

その後月は喋ってこなかった。俺はとりあえず嵐を呼ぶ転校生を待った。そして、そいつはやってきた。

その名は如月弦太郎。俺の学校に通う全員と友達になるという男だ。やつは確かに嵐を呼ぶ男だった。学校の常識に囚われず、己の信念を貫く。強い意思を持つ男だ。やつは遂に現れた怪物にも臆することなく立ち向かった。そして驚くべき変身を遂げた。

仮面ライダーフォーゼ。都市伝説の戦士、仮面ライダーの名を名乗る戦士だ。その力は凄まじく、怪物を次々となぎ倒す。まさに学園のニューヒーローだ。しかも弦太郎によって面白いことが起きた。

保健室の主で誰とも友達になろうとしなかった歌星賢吾。高飛車クインの風城美羽。弱い者いじめをしていたアメフトのキング、大文字隼。人を平気で騙す情報屋のJK。オカルト趣味を持つゴスの友子。彼女達が更生していったのだ。偉い、偉いぞ、弦太郎。この学校のどの教師よりも偉いぞ。

お前こそまさに天高の救世主だ。たまに教室や設備を破壊するのはやめてほしいとおもうが、大目に見てやろう。

まだまだ弦太郎が来たことで嬉しいことはある。あの天文学部に巣食う病原菌、牧瀬を倒してくれたのだ。いいぞ、いいぞ。よく牧瀬を倒してくれた。これで天文学部にも人が戻ってくるだろう。よくやった、弦太郎。

“天高よ。良かったな”

おお、月よ。弦太郎は素晴らしい嵐を起こしてくれました。

“そうだろう。そうだろう。だが、油断するな。まだお前のもとに

住まう悪の元凶が倒れたわけではない。十分に注意しろ”

了解しました、月よ。

“では、またな”

我望光明。彼を中心とした邪悪な勢力がいるかぎり、平和は生まれない。

しかし、生徒達もまた成長しているのだ。それこそ我望の予測を越えてな。弦太郎とその仲間達が未来への扉を開く。彼らが旅立つその日まで、俺は彼らの活躍を見届けよう。頑張れ、仮面ライダーフォーゼ。

天の川学園高校の思い（後書き）

お読みくださりありがとうございました。

建物の視点から物語を描くとうなるかを試してみました。

やはり、宇宙を目指す人々のための学校ですから現状に不満を抱いているのではないかと思ひまして。

感想やアドバイスなど、お待ちしております。

マシンマッシグラー 命名秘話（前書き）

マッシグラーが命名された時のことをマッシグラーの視点から描きました。

それではどうぞ。

マシンマッシグラー 命名秘話

俺の名はORB-40F。フォーゼのバイク型サポート用マシンだ。俺はパワーダイザーを発射台とすることで大気圏を突破することが出来る。しかし、さすがにその先には行けない。月にさえたどりつくことはできないのだ。そんな俺が大気圏を越える時は一つだけ。この地球に存在してはならないものを地球から追い出す時だけだ。

生まれてから10年以上の時が過ぎ、ようやく俺の使命を果たす時が来た。今回の敵はオリオン座のゾディアーツ。フォーゼは俺を乗り回し、パワーダイザーにセット。パワーダイザーより放たれたミサイルがゾディアーツを空に打ち上げた。そのまま、ダイザーは発射台に変形する。

『3 / 2 / 1 b r a s t O F F 』

カウント終了とともに俺は宇宙へ飛び立つ。今の俺はバイクじゃない。ロケットだ。俺はぶつかったゾディアーツごと大気圏を突破した。そして、俺から降りたフォーゼがスイッチを起動し、必殺技を放つ。その直後、俺は大気圏を降下していた。残念ながら俺に地球の重力をふりきけることは無理なのだ。だから、大気圏を突破したら地球に降りるしかない。そのまま天ノ川高校の倉庫に戻った。

倉庫に戻った俺のもとに三人の男女がやってきた。1人は俺の生みの親、歌星博士の息子の賢吾様。1人は賢吾様の唯一といっている友人、城島ユウキ様。そして、最後の1人はフォーゼになった男、如月弦太郎。賢吾様の友人になるうとしている方だ。賢吾様に代わってフォーゼに変身することになったらしい。賢吾様がフォーゼで

ないのは少し残念だが、賢吾様は横から指示を出してくれていたほうが安全だ。そういう意味ではよかったかもしれない。

「しかし、こいつすげえな。宇宙まで行っちまうなんてよ」

俺のほうを向いて言っているということは俺を褒めているのだろう。まあ、普通のバイクにはできないことには違いがないからな。

「ところでこいつ、なんていうんだ」

「開発コードはORB-40Fとなっていた」

「オーアールビー？なんか、名前って感じがしねえな」

開発コードなどそんなものだ。名前など所詮、識別の意味しか持たないのだからな。

「よし、俺がかっこいい名前つけてやるぜ」

かっこいい名前？一体どんなのをつける気だ。

「……よし、今日からお前はマシンマッシグラーだ」

マ、マッシグラー！？

「マッシグラーって？」

「宇宙までまっしぐらだからだ」

「……弦ちゃんらしいネーミングだと思うよ」

ちょ、ちょっとユウキ様。もっとまともなネーミングになるように説得してください。賢吾様も。

「……好きにすればいいんじゃないのか」

賢吾様！？何を言っているんですか。いくらなんでもこんな名前は嫌です。

「名前なんて所詮は識別のためのものだからな」

「おいおい、名前はもっと大事にしようぜ。賢吾」

「だから、名前で呼ぶな」

自分は怒るくせに、俺はスルーですか。もっといい名前をください。

「今日からお前はマシンマッシグラーだ。よろしくな」

よろしくな。じゃない！もっとまともな名前をつけてくれええええ！！

こうして俺はその日からマシンマッシグラーになってしまった。もう名前を識別のためのものだなんていいませんから、もっといい名前をください。お願いします。

「いいじゃないか。俺なんてバガミールだぜ。ハンバーガーだからって……」

「それ言っなら僕なんてポテチヨキンだぞ。安直すぎる」

「フラシェキー（フラシェキーはフラシェキーでいいかな）」

マシンマッシグラー 命名秘話（後書き）

マッシグラーは弦太郎命名だそうですが、フードロイドもシンプルな名前ですよね。歌星博士は結構ユニークなセンスをお持ちみたいです。

感想要望ありましたら、どうぞお書きください。

仮面ライダーアキラ 過去と未来と友情（前書き）

MOVIE大戦MEGAMAXのアキラが未来から現れたシーンを基に作った小説です。ネタバレ注意。
ストロンガー部分が少し変えてあります。

仮面ライダーアクア 過去と未来と友情

「オーシャニックブレイク！」

初めて仮面ライダーという存在が確認されてから80年が経った。多くの仮面ライダーは人々の前から消えていった。元々そんな存在はいなかったのか、あるいはさすがの彼らも寿命を迎えたのか。その真実を知るものは少ない。

しかし、少なくとも今、1人の仮面ライダーが存在していた。今もモンスターをスライディングキックで葬ったところだ。青い装甲に包まれた戦士、仮面ライダーアクア。それが現在の仮面ライダーの名前だった。

「終わったな」

アクアはベルトのアクアドライバーを取り外す。その姿が青年に変わった。名前を湊ミハルという。

ミハルはアクアドライバーを見ながら、このベルトをもらった日に思いを馳せた。

「このベルトでモンスターを倒せ」

アクアドライバーを作った博士はそういつてベルトを渡してきた。困っている人間を助けたい。その思いを抱えていたミハルはベルトを受け取った。しかし、仮面ライダーに変身できなかった。

アクアドライバーは水の力で変身する。しかし、ミハルは水が苦手だったのだ。アクアに変身できずに困っていたミハルのもとに鴻上

という白髪の老人が現れた。

「このベルトで君も仮面ライダーになれる」

今度のベルトはメダルを使ったものだった。これなら変身できる。ミハルは仮面ライダーポセイドンに変身し、モンスターと戦った。だが、モンスターは彼の予想より強大で彼は負けてしまった。

失意のミハルの前で突然空間が開き、中からメダルが流れ込んできた。

メダルには欲望が満ちていた。欲望に触発され、ポセイダンのメダルにも意志が芽生えた。永遠に戦いを続ける。その欲望にミハルは意識を乗っ取られ、争いを求める怪物になろうとしていた。時空の歪みにより、40年前にたどり着いたミハルの前に現れたのは仮面ライダーオーズ、火野映司だった。初めはメダルに操られていたミハルだったが、映司により正気を取り戻すことができた。そして映司と仲間達の戦いから自分に無かったのは勇気と気づくことができた。

勇気を手に入れた彼は自分から分離したポセイドンとオーズとともに倒した。そして、映司から受け取ったパンツを手未来へと帰還した。

「俺は今日を守れてるよ、映司さん」

ミハルは四十年を越えた感謝の言葉を放った。それから、自分の頬に何かが触れたことに気がつく。周囲には白いものが降っていた。いつの間にか雪が降りだしたらしい。今日はクリスマスだ。どうやら今年はホワイトクリスマスになるようだ。ミハルは家に帰り、自分もクリスマスを楽しもうとした。だが、今度は赤い羽が降ってきた。困惑するミハルは羽をよく見てみた。どこかで見たものだ。

ミハルは羽に関する記憶を引き出そうとした。しかし、その思考は目前に現れた男の出現で途絶えてしまった。

「あんたは……」

ミハルは彼を見たことがあった。それは40年前に行った時だ。映司の側にいた赤い右腕を持つ男、アंकだ。彼が人間ではないことは見せつけられていたが、この時代にいるのは驚きだった。

アंकもまた、ポセイドン同様メダルの生み出した存在だった。しかし、彼は映司をサポートし、共に戦っていた。映司との詳しい関係は知らないが、二人が深い絆を持っていたのはミハルでも理解していた。そのアंकが一体なぜ自分の前に……それを聞こうとしたミハルにアंकは右手を開く。その手の中には三枚のメダルがあった。タカ、トラ、バッタ。それぞれの動物のシンボルが描かれている。

「これを映司に届ける」

「映司さんに？」

「そうだ。ただし、四十年前のな」

アंकによるとポセイドンや他のメダルは四十年前の映司に預けられたらしい。メダルの力の使い方と危険性を誰よりも知っている映司に預ける事が一番安全だと考えての行動だった。しかし、どうやら映司にトラブルが起きたらしく、このままでは歴史が崩壊する可能性が出てきたらしい。そこでこの未来のコアメダルを映司に渡して、事件を解決しなければならないらしい。

「この未来のコアメダルを使えば時間を越えられる。さつさと映司に渡してこい」

「わかったけど……あんたはいかないのか」

「渡すだけならお前一人で十分だ。さつさといけ」

アंकはミハルに強引にメダルを渡してきた。ミハルはアंकの対応が腑に落ちなかったが、これは映司に恩を返す良い機会と考えた。アクアに変身し、コアメダルにより開いた穴に飛び込んで行った。

「そう何度も見られるか。若いあいつの顔なんて……」

アクアはたどりついた場所ですぐにオーズと会う事ができた。オーズはメダルを受け取ると、ロケットのような頭を持つライダーとともにシャトルに飛び込んで行った。これで自分が過去に置いてきたメダルの事件は終わるだろう。

しかし、よく考えるとコアメダルを渡したら自分は未来に戻れないではないか。オーズが帰るまで待たねばならない。アクアは耳を澄ますと戦いの音に気付いた。七人のライダーが様々な怪人と戦っていた。七人の一人、仮面ライダー一号にアクアの目はくぎ付けになった。

「あれは……あのライダーは……」

一号は二体の怪人に翻弄されていた。猫系グリード、カザリ。ナスカの地上絵を基にした赤い剣士、Rナスカ。二体の怪人はそれぞれ高速で行動し、一号に反撃の隙を与えない。他のライダーはそれぞれ怪人の相手で援護ができないようだ。アクアは一号に爪を刺そうとするカザリをキックで吹き飛ばす。

「君は……」

「こいつは俺に任せてあんたはあの赤いやつを！」

カザリは突然の乱入者であるアクアを排除しようとする。Rナスカは一号の背後から剣を降ろす。一号は背後にひじ打ちを決め、回し蹴りで蹴り飛ばす。

「もうお前の好きにはさせん！」

カザリは触手のようにうごめく髪の毛から弾を放つ。アクアはそれにかまわず走り、掌底をカザリに決める。押されたカザリは爪での反撃を試みるが、それをアクアに流され、パンチとキックのコンビネーションを受けてしまう。

アクアは足から水流を噴出して、飛びあがる。そして、カザリの体に水の勢いに乗せてキックを放つ。

「アクアヴォルテックス！」

キックを受けたカザリは爆発し、メダルと化した。

「ライダーキック！」

一号は空中でRナスカに飛び蹴りをヒットさせた。衝撃をともに受けたナスカは爆発する。

「ライダーパンチ！」

仮面ライダー二号は重量級グリード、ガメルに正拳突きを叩きこむ。赤い拳の突き刺さったガメルの体は崩れていった。

「V3反転キック！」

V3は土偶の怪人、クレイドールドーパントに飛び蹴りを食らわせ、空中で反転、もう一度キックを放つ。二度のキックに耐え切れず、クレイドールは爆発した。

「ロープアーム！」

ライダーマンはロープアームから出したロープを水棲系グリード、メズールに巻きつける。ロープアームを操り、二度壁に激突させるとメズールは爆発を起こした。

「Xキック！」

仮面ライダーXは空中に固定されたライドルで大車輪を使って加速。X字の態勢を取った後、昆虫系グリード、ウヴァに必殺のキックを決めた。ウヴァも他のグリード同様メダルの塊となった。

「大切断！」

仮面ライダーアマゾンにはサーベルタイガーの怪人、スミロンドーパントに向かって飛びあがる。そして、ジャンプの勢いを利用して右腕のヒレでスミロドンを切り裂いた。

「エレクトロファイヤー！」

仮面ライダーストロンガーは王族のような姿をした怪人、テラードーパントに向けて電撃を流す。テラーは電撃でダメージを受けるが、王冠から竜のような怪物を出現させた。テラードラゴンと呼ばれる

この怪物は、ストロンガーを殴り飛ばす。巨大な体から放たれる攻撃はストロンガーにダメージを与えるには十分だった。

「切り札を出してきたか。ならば、俺も全力で行く！チャージアップ！」

ストロンガーの胸にあるS字マークが回転を始めた。回転と共にストロンガーの角が銀色に染まり、胸に銀のラインが生まれる。超電子ダイナモを装備した事により得たストロンガー最大の力、チャージアップだ。一分間と言う時間制限こそあるものの、通常の百倍の力を発揮できるのだ。

ストロンガーはパワーアップしたその力でテラードラゴンを殴り飛ばす。パンチを受けたテラードラゴンは地面に倒れた。そのまま起き上がるのを待つストロンガーではない。空中に飛び上がり、必殺キックの態勢になった。

「超電ドリルキック！」

全身をドリルのように回転させ、ストロンガーはテラードラゴンを貫く。テラードラゴンは大爆発を起こした。爆発から現れたストロンガーはうろたえるテラーにも続けてキックを放つ。

「超電大車輪キック！」

空中で大の字となり、ストロンガーは回転して接近。テラーに急降下キックを決める。吹き飛んだテラーは一度立ちあがるも、体を駆け巡る超電子の力に耐え切れず、爆発を起こした。

「やったな、ストロングァー！」

「ああ、後はエクソダスだけだ」

エクソダス。オーズ達が潜入したシャトルのことだ。エクソダスが大気圏を突破する前にカンナギを倒せなければ、カンナギはコスミックエナジーをチャージしてしまう。そうならば、誰もカンナギによる支配を止める事はできなくなるのだ。七人ライダー達にできるのは、オーズとフォーゼの勝利を祈る事だけだった。

「ところで君は誰なんだ」

一号は自分を助けてくれたアクアに聞いた。

「俺は未来から来たライダーです」

「未来から……」

「あの、あなたが仮面ライダー一号ですよ」

一号は肯定した。アクアはそれに感激し、自分の姿が一号に似ている理由を教えた。

「このベルトを作ってくれた人は昔、あなたに助けられたんです。そして、俺の時代にモンスターが現れた時、決めたんです。世界を守るヒーローに相応しい姿、それはあなたのものしかない。だから、俺はあなたと良く似た姿をしているんです」

「そうか。そんなことが……」

「一号さん。あなた達の姿と意思は俺達が受け継ぎます。貴方達が守り抜く平和を、未来でもつなげてみせます」

アクアと一号は手をつなぐ。過去と未来をつなぐ腕だった。

「そうか。俺達の守れない未来を守ってくれ、未来のライダー」
「はい、一号さん」

手を離れた二人は空を見上げる。宇宙で何かが爆発していた。そして、二つの影が地上に向かっていている。

「オーズ！」

「それに、フォーゼもいるぞ！」

「カンナギを倒したんだな！」

「オーズ、フォーゼ、カッタ」

「ああ、我々の勝利だ！」

オーズとフォーゼは地上に降下した。八人のライダーがそれを迎える。

「よくやってくれた、フォーゼ、オーズ」

「おかげで地球の平和は守られた」

「俺達だけの力じゃありません。先輩達やミハル君、皆の力ですよ」

「そのとおりだ。それと仮面ライダー部や……撫子のな」

フォーゼは宇宙を名残惜しそうな目で見る。何かあったのか心配する仮面ライダー達にオーズは「青春ですよ」と言った。

「映司さん。少し俺の渡したメダルを貸してください」

「いいけど……」

メダルを受け取ったアクアは強く念じた。元の時代に帰りたいとその欲望に反応し、空間に穴が開いた。

「それじゃあ、俺は未来に帰ります」

「ちょっと、ミハル君。これは俺が受け取っていいの」

「はい。元々映司さんに渡しに来たわけですから。それじゃあ」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ。未来だかなんだか知らねえが、少し時間は無いのか」

フォーゼが慌ててアクアに聞く。確かに急いで帰らなければならぬわけではない。それを聞いたフォーゼはミハルに『友情の証』をした。

「これであんたとも友達だ」

「友達か……そうだな！」

横でアマゾンも自分の『トモダチ』のサインを送る。

「ミライノライダー、フォーゼ、トモダチ」

「おお、お前とも友達だ」

フォーゼとアクアもアマゾンに『トモダチ』のサインを送った。そして、十人の仮面ライダーは円を組んで手を重ねた。

「俺達仮面ライダーは戦う場所も、時代も違う」

「だが、戦う理由は一つ」

「自由と平和の為」

「それを忘れない限り、俺達仮面ライダーは皆友達。いつかまた、共に戦う日が来るかもしれない。その日まで……さらばだ！」

十人の仮面ライダーはそれぞれの居場所へ戻っていた。七人ライダーは世界各地へ。オーズはクスクシエの仲間のもとへ。フォーゼは仮面ライダー部のいる天ノ川学園へ。そして、アクアは未来へ。

未来にたどりついたアクアを待っていたのは、アンクとモンスターの襲来だった。どうやら、モンスターと仮面ライダーにクリスマスは無いらしい。

「でも、しょうがないか。俺の守るクリスマスが、皆のクリスマスになるのなら！」

アクアはモンスターとの戦いに向かう。アンクはある人物の顔を見に行くと言って、どこかへ飛んで行った。

もし、アクアにクリスマスプレゼントがあるなら、それは四十年の時を越えた友との出会いだったのかもしれない。

「俺は守る。皆の繋いでくれた今日を明日に繋ぐ！」

アクアミライダーは駆けていく。新しい未来に向かって。

仮面ライダーアキラ 過去と未来と友情（後書き）

どうでしたでしょうか。

仮面ライダーアキラは中々かつこよかったので、Vシネマで何かやってほしいですね。

感想お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4166z/>

バディムの人々の短編集

2011年12月25日14時53分発行